

ナミビア北部における食肉産業の展開とオヴァンボ農牧民の 牧畜活動の変容

—キャトルポストの設置に注目して—

藤岡 悠一郎*

Change in Livestock Farming among Ovambo Agro-pastoralists Related with Expansion of the Meat Industrial Sector of Namibia: With Special Reference to the Setting of Cattle Posts

FUJIOKA Yuichiro*

The meat industrial sector in Namibia has changed rapidly since becoming linked to the global economy after the country's independence from South Africa. Before independence, the meat industry was managed by colonists who ran commercial farms in the central and southern parts of the country, and who ignored livestock farming by "Black people" living in the north under apartheid regime. After independence, however, the nation has promoted livestock farming by people living in northern Namibia to involve them in the national meat market. On the other hand, the livestock farming of Ovambo has also changed in the past two decades, and some households have set "cattle posts," areas of grazing land surrounded by a fence. The purpose of this research is to clarify the relation between the changes in livestock farming among Ovambo agro-pastoralists and the expanding of meat industry of Namibia, with special reference to the setting of cattle posts.

Most cattle post owners have high-paying jobs, and their cattle management system is different from the old one. It is considered that they invested the money earned through their jobs into livestock farming, and that they introduced a new system into their livestock farming.

However, households that own cattle posts and those that do not showed the same tendency for the number of livestock purchases to be higher than the number of sales. The number of gifts of livestock was also high. This implies that their livestock farming is not directly connected with the meat industry. It is not a perfectly commercialized economy but rather a subsistence economy, the aim of which is to increase the number of livestock and the yield of crops by using the manure of livestock.

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2006年7月31日受付, 2006年11月7日受理

1. はじめに

南部アフリカに位置するナミビア共和国は、1970年代後半から90年にかけての独立闘争を契機に、大きな社会変革を経験した。第1次大戦後、当時の南西アフリカはドイツ植民地から南アフリカ共和国（当時の南アフリカ連邦）の委任統治領へと移行したが、1950年代初頭からのアパルトヘイトの実施とともに、南西アフリカの畜産政策は主としてドイツや南アフリカからの入植者の大規模農場が広がる中・南部を対象として行なわれ、ホームランド¹⁾の広がる北部には目が向けられてこなかった。中・南部の商業農家は、市場に家畜や畜産物を出荷することを最大の目的として牧畜を営み、改良種の導入や機械化を積極的に行っていた [Rawlinson 1994]。一方、当時の北部では自給用のミルクや肉の供給を主目的とした生業牧畜が営まれ、交換を基本とした独自の経済システムが成立していたと考えられる。しかし、1990年の独立を契機にアパルトヘイトの撤廃や経済の自由化が進み、EUなどの海外市場への出荷を目指して家畜の販売頭数を増加させることが、食肉産業界の課題となった [Rawlinson 1994]。そのため、北部の生業牧畜を国の市場へと取り込む動きが1990年代初頭から活発化している。その結果、1989年には国全体の1%にしか満たなかった北部市場でのウシ販売頭数（5,079頭）が、1992年には17,106頭（5%）と3.5倍ほどに上昇した。しかし、その後は販売頭数が伸び悩み、2004年には9,401頭（3%）まで落ち込んでいる [Meat Board of Namibia 2004]。

このような状況を政府は重大な問題として捉え、国内の研究機関を中心に多くの調査が実施されてきた。たとえば、Liagre *et al.*[2000] や Republic of Namibia[2000] は、北部のインフォーマルセクターでの家畜の売買を調べ、そこでの取引価格に比べ市場での価格が低いことを、市場での販売頭数低下の原因として指摘している。その一方で、Liagre *et al.*[2000] は、北部農家のなかにも数人の労働者を雇い、改良種を導入して車をもつような近代的な牧畜を営む商業農家が出現していることを指摘している。しかし、彼らの具体的な牧畜活動については報告していない。

アフリカの他地域においても、住民の生業牧畜と市場経済との接合に関する研究が行なわれてきた [池谷 1993; 孫 2004]。ケニアの牧畜民サンプルの社会において研究を行なった湖中 [2002, 2004] は、生業牧畜が市場経済に巻き込まれていく状況のなかで、サンプルの家畜商が単に市場向けの家畜生産に移行するのではなく、生業牧畜と商業を複合した独自の活動を営んでいることを示した。

ナミビア北部の家畜市場における販売頭数の伸び悩み・下降は、北部の住民による牧畜活動

1) エスニック・グループごとに割り当てられた居留地。南アフリカによる不法統治期である1968年に施行された。

が、全面的に市場経済化しているわけではないことを示していると考えられる。では、そのような状況下で現れた近代的な商業農家は、どのような活動を営んでいるのであろうか。

本稿では、ナミビアの食肉産業がグローバルに展開する状況のもとで、農牧民オヴァンボ (Ovambo) の生業牧畜がいかに変容しているのかについて、近代的な商業農家の活動とそれ以外の農家の牧畜活動の違いや両者の関係性に注目しつつ明らかにする。

オヴァンボの主生業は、農業と牧畜であり、牧畜に関しては村から数十キロメートル離れた場所に放牧キャンプを設け、季節に応じて家畜を移動させる点が特徴的である。福井 [1987] は、牧畜を農耕との結合の有無によって遊牧と農牧に分類し、さらに農牧を移動性に着目して遊牧遊農・遊牧定農・定牧定農に分類した。²⁾ これに従うと、農耕地の移動を行なわないオヴァンボの農牧は、遊牧定農ということになる。また、池谷 [2006] は、全家族が移動する遊牧に対して、家族の一部だけが移動するものを移牧とし、これは遊牧定農に含まれるとした。本稿では、オヴァンボの牧畜形態を移牧として記述する。³⁾ 彼らの移牧はここ数十年のあいだに大きく変化し、放牧キャンプ周辺にキャトルポスト (cattle post) とよばれる柵で囲まれた放牧地をもつ世帯が現れている。本稿では、移牧の変容を特にキャトルポストの設置やその背景、現在の利用方法に注目して検討する。

2. 調査地と調査の概要

2.1 調査地の概要

調査はナミビア共和国北部に位置するオシャナ州のウクワングラ (Uukwangula) 村 (以下 U 村と略す) にて実施した。その理由は、オシャナ州とその周辺にはナミビア人口の半数近くを占めるオヴァンボ農牧民が住んでおり、その中心都市であるオシャカティ (Oshakati) が、北部における食肉産業の最大の拠点であるためである。U 村はオシャカティから西に 10km ほどの距離に位置する都市近郊村である。

アンゴラとの国境に近いナミビア北部には、北から南へとゆるやかに傾斜する平原が広がり、季節河川が網の目状に分布している (図 1)。年平均降水量が 300~500mm という乾燥気候下に位置し、12~4 月の雨季に降水が集中する。

ナミビア北部の植生は、マメ科ジャケツイバラ亜科の半落葉樹であるモパネ (mopane: *Colophospermum mopane*) の優占するモパネ群落に区分されている [Giess 1971]。また、一部の地域にはマメ科ネムノキ亜科の落葉低木 *Acacia arenaria* の優占するアカシア群落が分布

2) 稲村 [1995] は、福井の分類に対してアンデスの牧畜の事例から再検討を行なっている。

3) 移牧という語はもともと transhumance の訳語としてアルプスやヒマラヤなどの山地における標高差を利用した規則的な家畜の移動を指すものであるため、他地域の牧畜を検討する場合に適切ではないという指摘もある [Khazanov 1983; 福井 1987]。しかし、本稿では平面的な移動にも移牧という用語を適用させる小川 [1981] に従う。

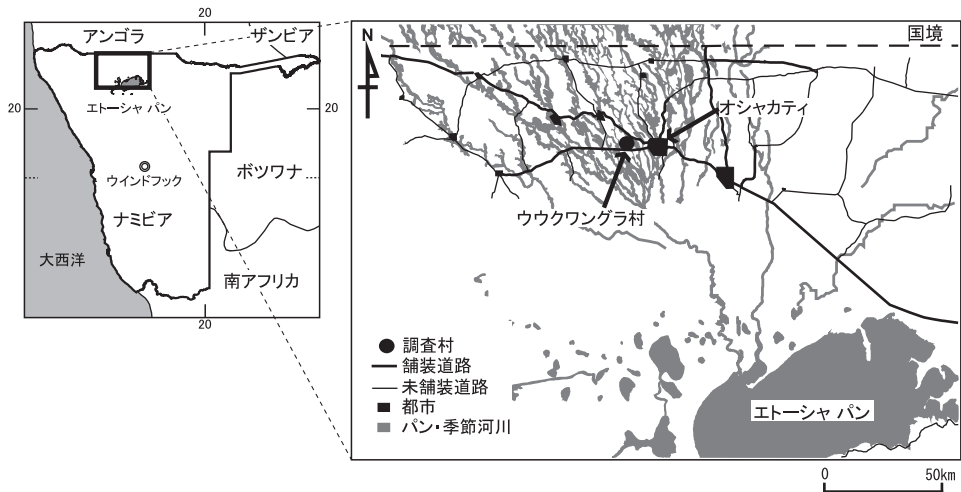


図1 調査地の位置

するが、それは、人口密度の高い都市周辺に偏っており、Mendelsohn *et al.*[2000] は人為的な攪乱のもとで形成されたことを示唆している。都市近郊に位置している U 村周辺では *Acacia arenaria* が優占し、モパネはほとんど生育していない [藤岡 2005]。季節河川の流路とその周辺には、樹木がほとんど生育しない草本群落が広がっており、家畜の放牧地となる。また、季節河川内の窪地には粘土が集積している場合が多く、乾季の終盤まで水が残る、家畜の水飲み場として利用されている。

U 村の位置するオシャナ州の人口密度は、18.7 人/平方キロメートルとナミビアのなかでは比較的高い [Republic of Namibia 2003]。ここに住むオヴァンボは、16 世紀にアフリカ中央部からこの地域に移動してきた [Williams 1991]。複数のサブグループにわかれており、ナミビア国内には 9 つのサブグループが住んでいる [Mendelsohn *et al.* 2000]。U 村住民の大部分は、そのなかで 3 番目に人口が多いクワンビ (Kwambi) に属している。彼らの住居は季節河川に挟まれた高台部分に設けられ、住居の周囲には数ヘクタールの畑が開かれている。村の形態は家どうしの距離が数百メートル離れた散村であり、それぞれの世帯の生業活動や経済的な独立性が高いという特徴をもつ。彼らの主な生業は農業と牧畜であるが、昆虫や植物の採集、季節河川での漁撈、そして都市での出稼ぎや日用品の販売が複合的に行なわれる。

2.2 調査期間と方法

現地調査は、2002 年 9 月～2003 年 3 月、2004 年 9 月～2005 年 4 月、および 2006 年 2 月～5 月に実施し、U 村の 30 世帯を対象にした。これらの世帯のうち、ウシをもつのは 21 世帯、キャトルポストを保有しているのは 8 世帯である。全 30 世帯の家長には、農業や牧畜の方法、家畜の売買・贈与などに関する聞き取り調査を行なった。男性の家長がない場合に

は、実際に家畜を管理している家長の息子などに牧畜に関する聞き取りを行なった。家畜の所有頭数やその性別は、家長への聞き取りとともに実際の観察によって把握した。30 世帯のうち、キャトルポストを保有する 8 世帯の家長（男性）とそれ以外の 7 世帯の家長（男性）には、これまでの職歴および家畜の売買に関する質問を行なった。また、過去の牧畜活動を把握するために、4 世帯の男性家長（T. A 氏：86 歳，S. A 氏：63 歳，D. A 氏：75 歳，A. S 氏：65 歳）に聞き取り調査を行なった。⁴⁾

キャトルポストをもつ世帯には、その保有にいたる経緯について聞き取りを行なった。また、キャトルポストを訪れる際に同行させてもらい、GPS による面積の測量や家畜数の計測、滞在している牧夫への聞き取りなどを行なった。

ナミビアの牧畜政策や市場経済化がこの地域におよぼす影響を把握するためには、ナミビア北部で家畜の購入を行なっている Meat Corporation (Meatco) のオシャカティ支部の工場主任にインタビューを行なった。

3. ナミビア北部における食肉産業の展開

3.1 南アフリカ委任統治下における食肉産業

南アフリカ共和国の統治下で、⁵⁾ アパルトヘイト体制のもとにおかれていたナミビアは、中・南部の自由保有地 (Freehold area) と北部を中心に広がるホームランドに区分されていた。自由保有地に指定された「白人」の居住地では、土地の個人所有が認められ、柵で囲まれた大規模な私有農場が広がり、商業牧畜が営まれていた。一方、ホームランドでは、個人の土地所有は認められていなかった。北部と中・南部のあいだには柵が設置され、北部から南部への家畜の感染症の伝播を防ぐという名目のもとで、北から南への家畜の移動が禁止されていた。そのため、大規模な市場への家畜や畜産物の供給は、商業農場を営む「白人」が独占していた。

国内市場や南アへの家畜の輸出を調整していたのは、The Meat Control Board of South West Africa (Meat Board) であった。この機関は南ア本国の Meat Board が設立された翌年の 1935 年に設立され、南ア政府の政策のもとで活動していた。家畜生産量の増大や食肉の品質向上を目指した南ア政府や Meat Board の取り組みは、基本的に中・南部の商業農家を対象にしたものであった [Liagre *et al.* 2000]。たとえば、南西アフリカ（現在のナミビア）の畜産業の拡大に大きく貢献した補助金制度は、中・南部の農家を対象としたものであり、北部には南アに家畜を出荷するための大規模な市場は設置されなかった [Liagre *et al.* 2000]。

4) インフォーマントの年齢は、本人への聞き取りとともに、植民地期に南ア政府が発行した ID カードなどの資料で確認した。本人がそれらの資料をもたない場合、配偶者との年齢差からも推定した。

5) 1945 年、南アはナミビア（当時の南西アフリカ）を国連の信託統治領へ移行させることを拒否し、不法統治を続けた。

中・南部の商業農家は、家畜の改良種を導入し、市場での販売を目的とした集約的な牧畜を行っていた。1950年代の後半まではバター産業が活発であったが、それ以降は南アフリカの農業セクターの多角化や補助金制度の導入により、家畜の市場への出荷が増加した [Liagre *et al.* 2000]。市場で売却されたウシの大部分は南アへ輸出された。たとえば1979年の場合、市場に出荷されたウシのうちの54%が生きたまま南アに輸出された。38%のウシはナミビアで食肉に加工されたが、その大部分が南アへ輸出され、国内消費にまわされたのはわずかに8%にすぎなかった [Hishongwa 1992]。

中・南部の商業農家の牧畜活動を支えていたのは、黒人の契約労働者であった。白人の農場の多くは、数名の契約労働者を低賃金で雇い、搾乳や放牧などを任せていた。こうした契約労働者の大部分は、人口が多く、ドイツの統治期に雇用契約が交わされていたオヴァンボであった [Hishongwa 1992]。

3.2 独立に伴う畜産政策の変遷

1990年の独立以降、ナミビアの食肉産業を主に担ったのは、1992年に法人に指定された Meat Corporation (Meatco) である [Rawlinson 1994]。Meat Board は引き続き存続し、市場への出荷量の調整や食肉の市場価格の設定を司っている。Meatco の最も重要な役割のひとつは、北部の共同利用地における生業牧畜の市場への取り込みであった [Liagre *et al.* 2000]。その背景には、これまでの南アへの食肉の輸出を継続するとともに欧米諸国への輸出を促進するために、食肉の供給量を増加させることが必要になったという事情があると考えられる。人口が少ないナミビアの国内市場には限りがあり、独立以前には食肉の大部分が南アへの輸出にまわされてきた。そして、独立に伴う経済自由化により、新たな輸出先として EU 諸国に目

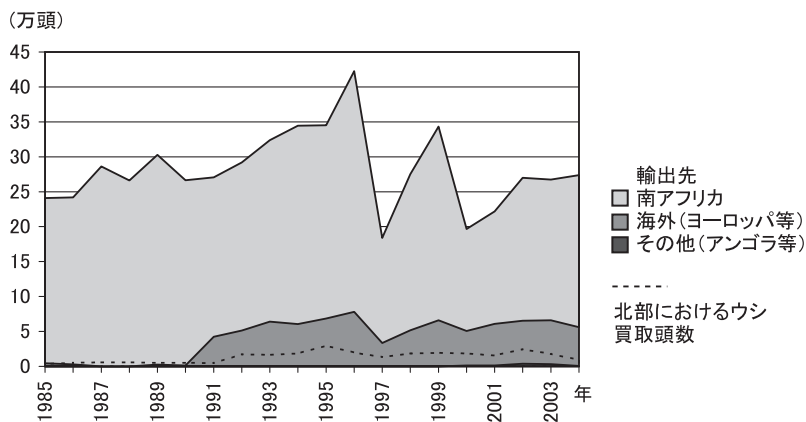


図2 ナミビアにおけるウシの輸出頭数と北部におけるウシ買取頭数の推移

注) 北部のウシ買取頭数は、Katima Mulilo, Oshakati, Rundu の3都市の Meatco における取り引き数を示す。

出所：Meat Board of Namibia [2004] より作成。

が向けられた。図2は、1985年から2004年にかけて輸出されたウシ頭数の推移を示したものである。Meatcoは1992年以降、北部の旧ホームランドに3箇所の食肉工場を設置し、ウシの買い取り・加工・出荷を行なった。その1箇所はオシャナ州の中心都市オシャカティである。⁶⁾ その結果、北部におけるウシの買取頭数は増加し、1991年に4,837頭であったものが、1992年には17,106頭と3.5倍近くに増加した(図2)。国全体の買取頭数に占める割合も1991年の1%から5%へと増加し、加工された食肉は輸出用として出荷された。しかしながら、海外輸出量は、1996年をピークにむしろ減少している。これは、経済自由化にともない、海外という新たな市場が開かれつつも、輸出用の買取頭数が不足している状況を示していると思われる。

北部での食肉産業振興のため、政府やMeat Boardはいくつかの取り組みを行なってきた。そのひとつは、ナミビア国内のウシ買取価格の一元化である。⁷⁾ 1992年までは、自由保有地とホームランドのあいだでウシの買取価格に格差があり、北部のほうが低く設定されていた。そのため、一元化ののちは、北部では買取価格が上昇した。また、政府は、北部における生業牧畜の技術支援と品質改良のために、いくつかのプログラムを実施した。そして、改良種の導入を行なう世帯に補助金をだす措置も行なわれている。

このように、独立以降のナミビア食肉産業界の大きな課題は、輸出量の増加のために北部の生業牧畜を市場へ取り込むことであり、その取り組みは一定の成功を収めてきたといえる。しかし、北部の販売頭数は1995年の29,690頭(国全体の7%)をピークに次第に減少し、1997年には13,522頭(6%)、2004年には9,401頭(3%)まで落ち込んでいる[Meat Board of Namibia 2004]。国やMeatcoの積極的な取り組みに反して販売頭数が減少している状況は、住民がウシを市場に売ろうとする意欲が高くないことを示していると考えられる。それでは次に、オヴァンボの牧畜活動について検討する。

4. オヴァンボの牧畜活動とその変遷

4.1 過去の移牧と農牧複合

オヴァンボの生業は、農業と牧畜を中心に、季節河川での漁撈や果実・昆虫の採集、出稼ぎなどから構成される。なかでも、トウジンビエを主作物とした農業とウシ・ヤギなどの牧畜に特に重点が置かれ、刈り跡放牧などを通じて両者が組み合わせられてきた[Williams 1991]。移牧は近年に始められたものではなく、過去の民族誌などにも記載されてきた。⁸⁾ U村の年長者

6) 他の2箇所はカプリビ州のKatima Muliloとカバンゴ州のRundu。

7) ウシの年齢や肉の状態にもとづいて各個体の等級を決定し、等級ごとの単価にその個体の体重を積算して価格を決定する。

8) 古くは、植民地期以前に本地域を探検したGalton[1851: 126]の探検記にも記載がみられる。それ以外にはSiiskonen[1990]、Williams[1991]など。

への聞き取りにおいても、少なくとも 50 - 60 年ほど前には行なわれていたという。生業の概要は次のとおりである。

雨季の始まる 12 月頃から乾季の始まる 5 月頃までは、村の東西を流れる季節河川の河床を中心に家畜の放牧を行なった。この時期は農繁期にあたるため、日中の家畜放牧は牧童の管理のもとで行ない、夜間にはそれぞれの住居付近の家畜囲いに収容した。牧畜の対象とされた家畜は、ウシ・ヤギ・ヒツジ・ロバであり、ウシとヤギの頭数が多く、ロバは運搬・耕起のために数頭のみが飼養されていた。雨季のあいだにはメスウシの搾乳を行ない、酸乳に加工したものを日常のおかずとした。農業は住居の周囲にひらいた畑で行ない、トウジンビエ・ソルガム・ササゲ・バンバラマメなどを栽培した。焼畑は行なわれず、基本的には同じ畑が毎年利用され、12 月に播種、5 月に収穫が行なわれた。作物の収穫が終わると、畑で家畜の刈り跡放牧を行ない、牧童がつねに家畜を見張ることはなくなった。刈り跡放牧の利点として村人は、家畜が栄養分の多い飼料を食べることができることと、畑に厩肥が投入されることをあげていた。

移牧は、一時的な放牧キャンプ、オハンボ (*ohambo*) を設置して行なった。移動したのは乾季半ばの 8 月頃で、雨季が始まる 12 月頃には村へ戻した。移牧は毎年行なわれたわけではなく、2~3 年に一度程度であったという。オヴァンボには 9 つのサブグループがあるが、乾季の放牧地はそのグループごとに定められていた。U 村の大部分が属するクワンビの放牧地は村の南方に位置していた。U 村では 30km ほど離れた水の得られる 3 地点を選び (図 3)、その年の乾燥の度合いに応じてどこに連れて行くかを決めたという。当時は放牧地周辺に住む人はなく、村も分布していなかった。家畜の移動やキャンプでの滞在は、家長とその兄弟あるい

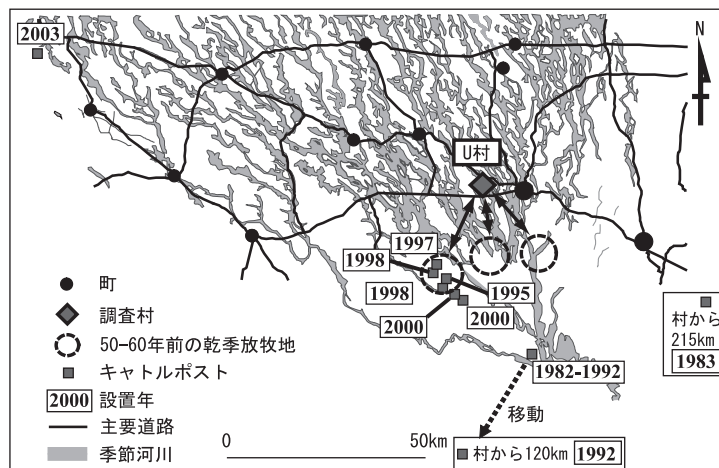


図 3 キャトルポストの位置

は息子などの数名の男性によって行なわれ、そのキャンプから少し離れた場所には同じ村の他世帯や他村の世帯もキャンプを張っていたという。放牧キャンプには樹木で簡易小屋が設けられ、村からもってきたトウジンビエ粉や家畜・野生動物の肉が食べられた。当時は、放牧キャンプ周辺にスプリングボックやクドウなどの野生動物が生息していたため、罠や弓を利用して狩猟を行なった。

しかし 1980 年代後半になると、このような移牧は行なわれなくなったという。その理由のひとつは、1980 年代後半から 90 年代初頭にかけての断続的な旱魃にもなつてウシの頭数が減少したことであった。たとえば、現在 36 頭のウシをもつ S. A 氏は、当時はその倍ほどのウシを所有していたようだ。また、かつての放牧地周辺に移住する人が増加し、新たな村が形成されて放牧地が不足するようになったことも移牧が衰退した原因のひとつである。人々は独立闘争から避難したり、村の人口増加による土地不足に対処するために新村へ移住した。そしてこの人々が移住先で家畜の放牧を行なったため、U 村の住民は自由な移牧を行なうことが難しくなった。

4.2 キャトルポストの出現と展開

その一方で 1980 年代から、キャトルポストとよばれる放牧地をもつ世帯が現れ始めた。かつての放牧キャンプであるオハンボが乾季の一時的な移牧に使われていたのに対し、キャトルポストの特徴は永続的に利用される点である。一般にキャトルポストには柵が設けられ、そのなかに牧夫の小屋や家畜囲いが設置されている。また、柵の内部に畑を設ける世帯もみられる。キャトルポストという用語は英名であり、オヴァンボ自身はかつての放牧キャンプを指す「オハンボ」という言葉を今でも使うことが多い。本稿では、かつての放牧キャンプと区別するため、便宜的にキャトルポストの語を用いることにする。

U 村で初めてキャトルポストを設置した世帯が現れたのは、1982 年のことである（図 3）。その数は次第に増加し、現在キャトルポストをもつのは 8 世帯となった。そのうち 1 世帯（A. D 氏）は 2 箇所を保有している。1982 年に最初に設けられたキャトルポストは、1980 年代後半および 1991 年の旱魃で家畜の被害を被ったため、1992 年には牧草が豊富で水が得られるさらに遠方へと移動された（図 3）。

表 1 は U 村住民がもつキャトルポストの概要を示したものである。まず、キャトルポスト保有者の職業をみると、地方議員や公務員、軍人など比較的高収入の職業に就いている人が多いことがわかる。このなかで、現在職をもっていないのは S. A 氏と D. A 氏であるが、S. A 氏は息子が南部で職に就いており、また D. A 氏は職をもつ兄弟（他村在住）とともにキャトルポストを保有している。柵は 1 箇所を除くすべてのキャトルポストに設けられている。この 1 箇所は高木の密集する森のなかにあるために柵の設置が困難であったが、年間を通じて家畜が滞在している。柵で囲われた面積は 20～87ha と幅広い。この面積には上限がゆるやかに定め

表1 U村のキャトルポストの概要

保有者	現在(過去)の主な職業	村からの距離	設置年	柵	面積 (ha)	設置費	雇用牧夫		家畜の種類	ウシ所有頭数	畑開墾年	畑面積 (ha)	
							人数	給料					
		45 km	1982-92	×	—	0	—	—	—	×	—	—	
A. D	地方議員, 酒場経営	128 km	1992	×	—	0	2人	N\$400/月	ウシ・ヤギ・ヒツジ	157頭	×	—	
		21 km	1995	○	67	N\$600	1人	N\$400/月	ウシ	○	1995	12	
L. P	酒場経営 (公務員)	23 km	1998	○	87	N\$600	1人	N\$300/月	ウシ	26頭	○	1998	5
P. A	鉱山	25 km	2000	○	86	N\$600	1人	N\$300/月	ウシ	30頭	○	2000	4
S. A	(鉱山)	26 km	2000	○	31	N\$600	1人	N\$300/月	ウシ・ヒツジ	36頭	○	2000	4
F. A	軍隊	95 km	2003	○	25	N\$600	0人	—	—	15頭	×	—	—
P. I	建設業	20 km	1998	○	30	N\$600	1人	N\$400/月	ウシ	60頭	○	1999	2
M. A	政党調整員	215 km	1983	○	?	N\$400	2人	N\$500/月	ウシ	81頭	○	1991	?
D. A	(鉱山)	20 km	1997	○	20	N\$600	1人	N\$350/月	ウシ	79頭	○	1997	7

- 1) 畑の面積はGPSを用いて計測した。
- 2) 面積の「—」は、柵がないために面積が呈示できないこと、「?」は未測量であることを示す。
- 3) F. A 氏のキャトルポストは、調査時点では設置したばかりであったため、雇われた牧夫はおらず、F. A 氏の子どもや親戚が数名滞在し、キャトルポストの整備とウシの放牧を行っていた。

られており、柵を設置する際にはその土地が属する村の村長 (headman) とともに場所と面積を協議する。また、キャトルポスト設置の際には N\$600 を村長に支払う必要がある。⁹⁾ 柵で囲われた土地の面積は、ウシの頭数に比例しているわけではない (表 1)。家畜の放牧は必ずしも柵のなかだけではなく、水場への移動もかねてその周囲でも行なわれる。そのため、ウシを多数もつ世帯でも周囲の土地に余裕がある場合には広い面積を囲い込む必要はない。また、広い面積を囲う場合には、より多くの建材やワイヤーなどの資材と労働力が必要となることから、面積を規定する大きな要因となる。

ところで、ナミビアの独立前後の時期には、ホームランド (独立後のコミューナルランド) において柵による土地の囲い込みが進行し、投機的な土地の保有が行なわれたことが知られている [Tapscott and Hangula 1994]。キャトルポストの展開はこのような動きに触発された可能性も考えられる。しかし、U村のキャトルポスト保有世帯の場合には、ウシ放牧や畑の設置などの土地利用を実際に行なっているため、完全なる投機目的で土地を囲い込んでいるわけではないと考えられる。

保有者が長期間キャトルポストに滞在することはなく、雇用された牧夫が家畜管理を行なっている。牧夫の大部分はラジオなどで公募されるため、保有者とのあいだに親戚関係がある場合は少ない。牧夫の仕事は重労働のうえ給料は N\$300~500 と低い。¹⁰⁾ キャトルポストの保有

9) 柵を設置しない場合には必要ない。支払う額は、クワンビのチーフとそのチーフに属する土地の村長ら数十名で行なわれる会議で決定される。N\$ はナミビアドル。1N\$=約 18 円 (2005 年時点)。

10) スーパーのレジ店員など一時的な仕事の場合、おおよそ 1 ヶ月に N\$600~900 程度の収入となる。

表 2 1年間のキャトルポスト運営に必要な経費

項目	単位	計算	平均費用
牧夫の雇用費	N\$300~500/人/月	N\$500×12 ヶ月	N\$6,000
牧夫の食費	約N\$50/月	N\$50×12 ヶ月	N\$600
ウシの予防接種	ワクチン：ウシ 50 頭分=約 N\$180		N\$180
ガソリン代	ガソリン代：N\$5/L，距離約 30km， 燃料効率 10km/L，月 2 回	N\$30×2×12 ヶ月	N\$720
畑の耕起（トラクターの借用）	トラクター借用料：1ha=N\$180	N\$180×4 ha	N\$720
畑作業（播種・除草など）	少年たちによる手伝い： N\$180/h/約 10 人	N\$180×8 時間×2 回	N\$2,880
計			N\$11,100

1) 1N\$=約 18 円（2005 年現在）

2) 畑作業は 10 名ほどの少年・少女からなる組織に委託する場合が多い。人数に関係なく、1 時間あたりの値段が N\$180。

者は、月に数回様子を見に行くが、その際には牧夫の副食として市販の魚や缶詰、干し肉などをもっていく。主食は、主にキャトルポストに設けられた畑で自給する。この畑の面積は 2~12 ha であり、村の畑と同程度の広さをもつ。栽培される作物はトウジンビエを中心にソルガムやササゲ、バンバラマメと村と同様である。キャトルポストで収穫された作物の大部分は車で一旦村へ運ばれて保有者の世帯で保存されるが、大部分は牧夫の食料として再度キャトルポストへ運ばれる。

キャトルポスト運営のひとつの特徴は、設置や維持のために多額の費用がかかる点である。表 2 は、1 年間の運営費を概算したものである。牧夫の雇用費や食費のほかに、保有者がキャトルポストを訪れる際の燃料代、¹¹⁾ ウシの感染症を防ぐための予防接種代、¹²⁾ 畑の耕起や除草作業など、合計すると年間 N\$11,100 ほどになる。これだけの額を支払えるのは、比較的高収入の職をもつ世帯だけであると考えられることから、オヴァンボ社会におけるキャトルポストの展開は世帯間の経済格差の拡大を示している可能性もある。次節では、キャトルポスト保有世帯と非保有世帯の差に注目しながら現代の牧畜活動を検討する。

5. 現代社会における牧畜活動

5.1 家畜の放牧

キャトルポストの展開は、オヴァンボの移牧にどのような影響を与えたのであろうか。第 4 節で述べたように、1980 年代の早魃はオヴァンボが所有するウシの頭数を減少させ、移牧を行なう世帯の減少につながったと考えられる。現在の U 村 30 世帯の家畜の所有頭数をみると、キャトルポストを保有する 8 世帯がウシ所有頭数の上位を占めていた（図 4）。キャトル

11) キャトルポストと村との移動には車が用いられる。キャトルポストを保有する 8 世帯はすべて車を持っている。

12) 主に炭疽病や気腫疽に対する予防接種。

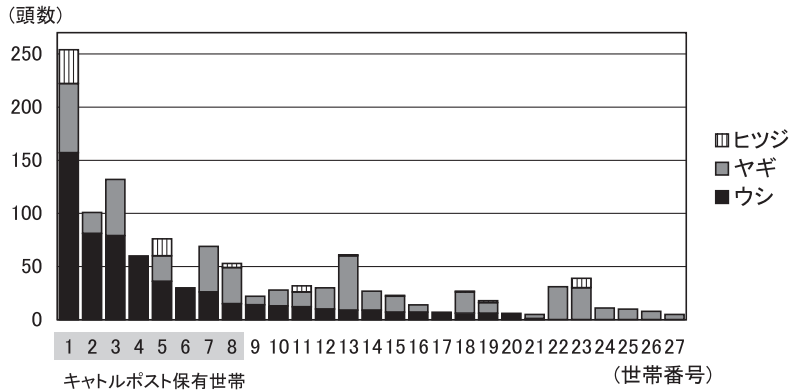


図4 U村30世帯における家畜所有頭数

注) 家畜を所有していない3世帯は図中に含まれていない。

ポスト非保有世帯のなかでは、ウシをもつ世帯が13世帯、ヤギ・ヒツジのみをもつ世帯が6世帯、家畜をもたない世帯が3世帯であった。ウシの平均所有頭数をみると、キャトルポスト保有世帯では60.5頭、非保有世帯では8.2頭と、両者のあいだには顕著な差がみられた。

2003年から2005年にかけて移牧を行なったのは、ウシをもつ21世帯のうち7世帯であり、¹³⁾ そのうち6世帯がキャトルポスト保有世帯であった。キャトルポストをもたない1世帯は、家長が高齢のうえ子どもが出稼ぎにでており、農繁期に家畜の面倒をみられる人がいないため、他村の親戚の家にウシを預けるために移動を行なっていた。そのため、かつてのオハンボを利用した移牧を継続しているわけではない。すなわち、キャトルポストを保有していない世帯は、現在ではかつてのような移牧を行なうことはない。

移牧を行なう世帯は、乾季の初めから半ばには村に家畜を連れてきて村周辺で約4ヵ月間の放牧を行ない、乾季の終わってから雨季の初めにはキャトルポストへと移動させる。¹⁴⁾ ここで注目すべきは、移動の時期が昔と異なっている点である。第4節で記したように、かつての放牧は乾季に放牧キャンプで、そして雨季には村周辺で行なっていた。当時の移牧の大きな目的は、乾季における牧草の確保であった。しかしながら現在、移牧を行なうのは刈り跡放牧のためである。刈り跡放牧を行なう理由のひとつは、家畜への栄養補給である。人々は、キャトルポスト周辺の草よりもトウジンビエやソルガムの茎のほうが家畜の肥育のためによいと考えており、畑に残された作物の茎を家畜に食べさせることを重視している。また、刈り跡放牧を行なうもうひとつの理由は畑への厩肥の供給である。特に近年では政府の指導により、農作物の収量を増加させるために厩肥を利用することが奨励されている。しかしながらオヴァンボ社会では、一部の世帯が家畜囲いにたまった厩肥を畑に運んでまいているが、畑全面にゆきわた

13) これらの7世帯では、2003～2005年の毎年移牧を行なった。

14) 所有しているウシの全体を移動させていたのは4世帯、その一部を移動させていたのは3世帯であった。

ることはない。キャトルポスト保有世帯のなかには、刈り跡放牧によって畑に厩肥を供給するだけでなく、キャトルポストの家畜囲いにたまった家畜の糞を村へ車で運んでいたものが 2 世帯あった。そして、この家畜の糞を自分の畑に撒くだけでなく、近所の世帯に贈与することもあった。

かつての移牧のシステムでは雨季にウシを村に戻していたために、ミルクの利用が可能であった。しかしながら、現在の移牧の方法では、雨季にウシをキャトルポストに滞在させておくため、ミルクの日常的な利用が困難になっている。ただし、ミルクを利用しないわけではなく、雇用している牧夫に搾乳を行なわせてプラスチックのタンクに保存させておき、家長がキャトルポストを訪れた際にそれを村に持ちかえる。そしてそのミルクは自家消費するだけでなく、大抵の場合は隣近所や他村の親戚などに数リットルずつ贈与していた。このミルクを販売することは、調査期間中にはみられなかった。また、遠方にキャトルポストをもつ F.A 氏と M.A 氏は、搾乳用に数頭のメスウシを村に滞在させていた。

一方、キャトルポスト非保有世帯は移牧を行なわず、村の周辺にある季節河川の河床で家畜を放牧し、キャトルポスト保有世帯の場合と同様に、収穫が終わった畑では刈り跡放牧を行っていた。また、トウジンビエやソルガムの茎の一部は収穫後に木の上などに保存し、季節河川の河床に牧草が乏しくなる乾季の終わり頃には、それを家畜に与えていた。しかし、村の周辺の季節河川では他村の住民も家畜の放牧を行なっているうえに、村の世帯数や家畜数も次第に増加しているため、¹⁵⁾ 乾季の後半には十分な飼料が得られないこともある。そのような状況でも彼らが移牧を行なわない理由としては、世帯あたりのウシの頭数はそれほど多くないこと、学校や出稼ぎにいく子どもが増えたために牧夫の労働力が不足していること、そしてかつて移牧を行っていた場所には新たな村が形成されていることなどが考えられる。

キャトルポストをもたない世帯では、雨季のあいだにも村にウシが滞在しているため、毎日のように搾乳が行なわれていた。それを酸乳に加工したものは毎日のおかずとして利用されたが、販売されることはなかった。

このように、キャトルポスト保有世帯と非保有世帯のあいだには、家畜の所有頭数や放牧場所、移牧の有無などの点で大きな差が生じていた。

5.2 家畜の売買と贈与

U 村 30 世帯における 2003 年から 2005 年にかけての家畜の売買・贈与頭数をみると (表 3)、ウシの購入頭数が 34 頭であったのに対し、販売頭数は 7 頭と、購入の 2 割ほどであった。また、小家畜についても購入が 19 頭に対して販売は 3 頭と、販売頭数が圧倒的に少ない傾向がみられた。

15) 調査を継続している U 村では、2003 年から 2006 年のあいだに 3 世帯が新たに親元から独立して自分の住居を建てた。彼らは自分たちの家畜を購入などによって入手している。

表3 U村30世帯における家畜の売買・贈与頭数

	ウシ頭数							
	購入		販売		贈与した		贈与された	
	オス	メス	オス	メス	オス	メス	オス	メス
2003年	5	6	1	0	7	0	0	0
2004年	7	4	1	1	6	1	18	0
2005年	7	5	4	0	12	0	22	0
小計	19(56%)	15(44%)	6(86%)	1(14%)	25(96%)	1(4%)	40(100%)	0
保有世帯	9	5	2	0	13	0	13	0
非保有世帯	10	10	4	1	12	1	27	0
合計	34(14)		7(2)		26(13)		40(13)	

	小家畜（ヤギ・ヒツジ）頭数							
	購入		販売		贈与した		贈与された	
	オス	メス	オス	メス	オス	メス	オス	メス
2003年	1	7	1	1	0	0	0	0
2004年	1	6	1	0	1	0	3	1
2005年	1	3	0	0	0	0	1	0
小計	3(16%)	16(84%)	2(67%)	1(33%)	1(100%)	0	4(80%)	1(20%)
保有世帯	0	10	1	0	0	0	1	0
非保有世帯	3	6	1	1	1	0	3	1
合計	19(10)		3(1)		1(0)		5(1)	

1) 合計の（ ）内の数字はキャトルポスト保有者による取り引きを示す。

2) 保有世帯・非保有世帯はキャトルポストの有無を示す。

キャトルポスト保有世帯の取り引きに注目すると、ウシの場合には、販売2頭に対して購入14頭、小家畜の場合には、販売1頭に対して購入10頭と、どちらも購入のほうが圧倒的に多かった（表3）。家畜の性別に着目すると、ウシの場合には、購入・販売ともにオスの割合が高く、購入したオス9頭のうち6頭は去勢オスで、3頭が種オス、販売したオスの1頭は去勢オスで1頭は種オスであった。一方、小家畜の場合には、主としてメスを購入していた。

小家畜とくらべて、ウシの場合に多くのオスが購入されている理由のひとつは、それが贈与対象となるためである。この贈与は主に結婚式の際に行なわれるが、夫方から妻方に贈られる婚資ではなく、¹⁶⁾結婚する夫婦にその親戚や知人が贈るものである。この贈与は、異なる村に住む人のあいだでも頻繁に行なわれる。対象となるのはウシの去勢オスで、一部ではヒツジの去勢オスも贈与される。結婚式の数日前に、贈り手は自分でウシをつれてその世帯を訪れる。贈られた家畜の大部分は結婚式当日に調理され、集まった人々に振舞われる。実際に贈与が行

16) 婚資に必要なウシ頭数は、オヴァンボのサブグループごとに定められているが、近年のクワンビ社会では、婚資にウシを含める必要はないとされている。

なわれる場には当事者のみしかいないことが多いが、贈られたウシは結婚式までの数日間、村の近くで放牧されるため多くの村人の目につき、誰が誰にウシを贈ったのかは村のうわさになる。そのために、ウシを贈ることは、当事者同士の社会関係を円滑に保つだけではなく、贈り手の名声を高めることにもつながっている。調査期間中に、キャトルポスト保有世帯は、合計 13 頭の去勢オスを他世帯の結婚式のために贈与した。これは販売された頭数よりもはるかに多く、購入された去勢オスの 2 倍ほどを占める。

一方、キャトルポスト非保有世帯では、ウシの場合には、販売 5 頭に対して購入が 20 頭、小家畜の場合には、販売 2 頭に対して購入が 9 頭と、キャトルポスト保有世帯と同様に購入の占める割合が圧倒的に多い傾向にあった（表 3）。その性別に着目すると、ウシの場合、販売頭数はオスの割合が高いものの、購入についてはオスとメスが同数であった。これは、ウシの所有頭数の少ない世帯が、頭数の増加を意図してメスを購入しているものと考えられる。¹⁷⁾ また、小家畜についてはキャトルポスト保有世帯と同様にメスの購入頭数が多い傾向がみられた。

家畜の売買をどこで誰と行なっているかに着目すると、キャトルポスト保有世帯ではオスウシを、非保有世帯ではメスウシやメスの小家畜の多くを、インフォーマルな家畜市で購入していた（表 4）。この家畜市は週に 3 日、U 村近くのオシャカティなどの町で開かれる。家畜を売却したい者はこの場に自由に家畜を持ち込み、訪れた客と価格を交渉して販売する。知人や親戚とのあいだでは、購入側あるいは販売側が話をもちかけ、お互いのあいだで値段の合意が得られれば取り引きが成立する。牧畜民からウシを購入するときには 100 km ほど西方にある牧畜民の村を訪問して交渉し、その場で買い取る。これは昔から行なわれてきた方法で、運搬のための車が必要であり手間がかかるが、価格が安いと主としてキャトルポストを保有しない世帯が多数の家畜を同時に買い付ける場合に行なわれる。たとえば、家畜市では未経産メスウシ 1 頭は、N\$1,100~1,500 で取り引きされるが、牧畜民から購入したものは N\$900 であった。¹⁸⁾ また、キャトルポスト保有世帯に特徴的であったのは商業農場から種ウシを購入していることである。この取り引きを行なった A. D 氏は、北部では出回ることが少ない改良種¹⁹⁾（ブラフマン）の種ウシを商業農場から買い付けていた。

17) 種オスは高価であるため、購入されることはまれである。キャトルポスト非保有世帯では、種オスをもつ世帯は少ないが、種オスをもつ世帯から一時的に貸与されることもある。また、季節河川での放牧中に他世帯の種オスとメスが出会い、種オスが他世帯のメスについていく場合があり、その際はそのまましばらく貸与されることが多い。

18) ウシの値段は、雌雄や体の大きさ、年齢、品種などをもとに決められるため、一概に比較できないが、牧畜民からは安く購入できるという意識がもたれている。

19) オヴァンボは、在来種をオシヴァンボ・ンゴンベ (*oshiwambo ngombe*)、外来種をオシシンバ・ンゴンベ (*oshibimba ngombe*) とよびわける。在来種には、サンガヤングニなどの品種が含まれ、外来種にはブラフマンやアフリカーナーなどが含まれる。

表4 家畜の売買の相手と場所

単位：頭

		ウシ								Meatco
		知人・親戚		家畜市		牧畜民		商業農場		
		オス	メス	オス	メス	オス	メス	オス	メス	
購入	保有世帯	0	2	7	2	0	1	2	0	—
	非保有世帯	3	2	2	6	5	2	0	0	—
	計	7		17		8		2		—
販売	保有世帯	1	0	1	0	0	0	0	0	0
	非保有世帯	1	1	3	0	0	0	0	0	0
	計	3		4		0		0		0

		小家畜								Meatco
		知人・親戚		家畜市		牧畜民		商業農場		
		オス	メス	オス	メス	オス	メス	オス	メス	
購入	保有世帯	0	8	0	2	0	0	0	0	—
	非保有世帯	0	0	3	6	0	0	0	0	—
	計	8		11		0		0		—
販売	保有世帯	1	0	0	0	0	0	0	0	—
	非保有世帯	1	1	0	0	0	0	0	0	—
	計	3		0		0		0		—

- 1) 表3で呈示した2003年～2005年までの取り引きを対象とした。
- 2) 保有世帯・非保有世帯はキャトルポストの有無を示す。
- 3) 取り引きを行なった牧畜民は西方に住むヒンバ人。
- 4) Meatcoではウシの販売や小家畜の購入・販売は行っていない。

また、取り引き全体で注目すべき点は、Meatcoへのウシの販売がみられなかったことであろう。ウシの販売頭数自体が少ないこともあるが、調査期間中には1頭もMeatcoに売られることはなかった。この理由としては、買取価格が低い点や取り引きが煩雑ですぐに現金を得ることができない点が考えられる。Meatcoは、村人が販売するウシが感染症にかかっていないことを確認するために、1ヵ月ほどのあいだ、そのウシを国の指定する放牧地にとどめておく。そのため、Meatcoから売り手に実際に現金が支払われるのは、1ヵ月以上後になってしまう。オヴァンボの人々が家畜を販売するときには、即時的に現金が必要な場合が多いため、Meatcoの買い取り方法は敬遠されてしまうのである。

6. おわりに

6.1 オハンボとキャトルポストの相違

これまでみてきたようにオヴァンボの移牧は1980年代以降に、一時的な放牧キャンプであるオハンボを利用した方法からキャトルポストを利用したものへと推移した。それでは、オハンボとキャトルポストのあいだにはどのような相違があるのだろうか。

キャトルポストは現在でも「オハンボ」とよばれており、かつてオハンボのために利用され

た場所に設置されることが多い。しかし、この両者のあいだにはいくつかの大きな相違点がみられる。移牧を行なう時期に注目すると、オハンボが利用されていたのは8月～12月頃までの約4ヵ月間であるのに対し、キャトルポストが利用されているのは9月～5月頃までの約9ヵ月間である。かつての家畜放牧の拠点は村であり、一時的な放牧キャンプとしてオハンボが利用されていたが、現在のキャトルポスト保有世帯の放牧の拠点はキャトルポストであり、村での放牧が一時的なものとなっている。かつては、乾季の終盤に水や牧草の不足に対処するために家畜を放牧キャンプに移動させていたのだが、現在では、刈り跡放牧をとおして村の畑に厩肥を供給し、同時に作物の茎を家畜に食べさせることが移牧の大きな目的となっている。

また、かつてのオハンボでは、家長とその親族の男性が家畜の面倒をみていたのに対し、現在のキャトルポストでは雇用された牧夫が家畜の管理を行なっていることも大きな相違点である。このように放牧のシステムとしてみると、キャトルポストとオハンボは全く異なるものであり、1980年代以降のオヴァンボ社会における牧畜は大きく変革されてきたとみることができよう。しかしながら、現在のU村の人々は、キャトルポストを保有して移牧をしている世帯こそが昔ながらのオヴァンボの牧畜を継続しているのだと考えており、オハンボとキャトルポストを全く別のものとして認識しているわけではない。この点については、今後に検討する必要があるだろう。

6.2 世帯間の格差

キャトルポスト保有世帯と非保有世帯の放牧方法の差異に注目すると、保有世帯の多くはキャトルポストにウシを常駐させ、刈り跡放牧のために村とのあいだで移牧を行なっているのに対し、非保有世帯では村にウシと小家畜を常駐させる方法をとっていた。すなわち現在のU村では、全く異なる放牧システムが併存する状況にある。そして、キャトルポストを設置して、ウシの所有頭数を増やせるかどうかは、高い現金収入が得られるかどうか依存していると考えられる。

キャトルポスト保有世帯の出現は、世帯間の格差の拡大を示しているのだろうか。家畜の保有頭数をみると明らかなように、キャトルポスト保有世帯はウシ所有頭数の上位世帯を占めている。これは、ウシをもたない世帯や小家畜すらもたない世帯がいることを考えると、大きな格差といえるだろう。

しかし、家畜の購入によって格差が拡大する一方で、家畜やミルク、厩肥などの贈与によって世帯間の格差が緩和されている。オヴァンボ社会では他世帯とのあいだで現金がやりとりされることは、親戚でない限り減多にない。すなわち、高収入を得られる職についている富裕世帯が現金を生業牧畜に投資していることは、その現金を家畜や畜産物という贈与可能な資源へと転換させるという側面をもっている。そしてこうした資源が他世帯に贈与されることによって、職の有無によって拡大しつつある世帯間の経済格差が緩和されていると考えられる。

6.3 オヴァンボの牧畜と市場経済化

独立後のナミビアでは食肉の輸出量を拡大するために、北部で行なわれている牧畜を市場経済へ取り込むための試みを実施されてきた。しかし、本稿で示したようにオヴァンボの牧畜活動は、国の食肉産業に取り込まれ、市場経済化したとはいいがたい。それは、キャトルポスト保有世帯についても同様である。

キャトルポストの所有者は、柵で囲った放牧地を利用し、食料運搬に車を用い、牧夫を雇用し、ウシの予防接種を行なうなど、非所有者に比べれば「近代的」な牧畜活動を行なっているといえるだろう。また、町に近い U 村住民の生活様式には、市場経済の影響が強く浸透している。しかし、キャトルポスト保有世帯の「近代的」な牧畜様式は、必ずしも市場経済と結びついてはいないのである。その最大の理由として考えられるのは、彼らにとって牧畜が現金獲得手段とみなされていないことである。キャトルポスト保有世帯の大部分は、現在あるいは過去に、比較的高収入な職についている（いた）富裕世帯である。そして、キャトルポストを利用した牧畜の開始と維持のためには、職をとおして獲得した現金を投資しているのである。

では、彼らの行なう牧畜は何を目的としているのだろうか。オヴァンボ社会では、ウシの出産はその所有者の富の増加の象徴と考えられ、生計においても精神面においても重要視されてきた [Williams 1991: 42]。オヴァンボの人々にとっては、ウシの所有頭数を最大化させること自体が大きな目的であると考えられる。しかしながら同時に、農業の収量を最大化させることも彼らの主要な目的のひとつである。それは、刈り跡放牧を目的とした移牧を現在も継続していることや厩肥の利用にあらわれていた。オヴァンボは収穫したトウジンビエをエシシャ (*eshisha*) とよばれる貯蔵庫に入れ、余剰分を数年間保管する。トウジンビエが満杯になったエシシャをいくつももつことが、旱魃年を乗り切るために重要である。つまり、キャトルポストの所有者がウシに対して現金を投資するのは、牧畜のみを重視しているのではなく、農と牧の両面での最大化と安定を意図していると考えられる。

また、家畜の取り引きに注目すると、贈与された家畜が販売されたものよりもはるかに多い点が特徴的であった。このことは、親戚や友人の結婚式の際にウシを贈与することが、家畜を増やすひとつの目的になっていることを示唆している。この点についてはより詳細に検討する必要があるが、ウシを贈与することは社会関係を形成・維持し、信頼や名声を獲得することにつながると考えられる。

市川 [1997] は、自然環境が有する物資の調達と配分としての経済には、食物や住居等の物質的充足と文化的・社会的意味の実現の両方を目的とする生業経済と、市場での交換を前提に生産と流通が行なわれる市場経済があるとしている。この指摘に従うならば、キャトルポスト保有世帯の牧畜も非保有世帯の牧畜も、ともに生業経済の範疇で行なわれていることになる。つまりキャトルポストは、職をもち一定の現金収入を得られるようになった世帯が、よ

り「近代的な生業牧畜」を営むために設置されているのである。しかし、当然ながら現在のオヴァンボの牧畜は、市場経済化への移行の過程にあるとみることもできるだろう。また、彼らの牧畜のあり方は1980年代後半の深刻な旱魃から回復したといえるほどの十分な時間がたっていないとも考えられる。彼らの牧畜活動の変容を理解するためには、こうした生態学的な要因と社会・経済学的な要因の両方を視野に入れつつ、今後の展開に注目していかなければならない。

謝 辞

本稿の執筆にあたり、まずなによりも私を村人の一員として受け入れ、調査に協力していただいたウクワングラ村の人々に謝意を述べたい。特に、ロト・パウルス氏には私を家族の一員として接していただき、カイタ・アイバンダ氏には調査の補助をしていただいた。また、Meat Corporationのジミー・ネル氏にはインタビューに応じていただいた。

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の水野一晴先生には、調査地でのアドバイスから執筆時の構成にいたるまで終始ご指導を賜った。同研究科の太田至先生からは、論文執筆時に多くのアドバイスをいただいた。また、同研究科の皆様からは、ゼミや個別の討議を通じて多くのご助言をいただいた。なお、本研究は、科学研究費補助金（「南部アフリカにおける「自然環境－人間活動」の歴史の変遷と現問題の解明」研究代表者：水野一晴）および21世紀COEプログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」からの助成を受けて行なった。ここに記して謝意を表します。

引 用 文 献

- 藤岡悠一郎. 2005. 「ナミビア北部における植生変化と農牧民オヴァンボの建材利用の変遷」『アフリカ研究』66: 47-62.
- 福井勝義. 1987. 「牧畜社会へのアプローチと課題」福井勝義・谷泰編『牧畜文化の原像』日本放送出版協会, 3-60.
- Galton, F. 1851. *Narrative of an Explorer in Tropical South Africa*. London, New York, and Melbourne: Ward, Lock and Co.
- Giess, W. 1971. A Preliminary Vegetation Map of South West Africa, *Dinteria* 4: 1-114.
- Hishongwa, N. 1992. *The Contract Labour System and Its Effects on Family and Social Life in Namibia: A Historical Perspective*. Windhoek: Gamsberg Macmillan Publishers.
- 市川光雄. 1997. 「環境をめぐる生業経済と市場経済」青木保ほか編『環境の人類誌』岩波講座文化人類学第2巻, 岩波書店, 133-161.
- 池谷和信. 1993. 「ナイジェリアにおけるフルベ族の移牧と牧畜経済」『地理学評論』66A (7): 365-382.
- _____. 2006. 『現代の牧畜民－乾燥地域の暮らし』古今書院.
- 稲村哲也. 1995. 『リャマとアルパカー－アンデスの先住民社会と牧畜文化』花伝社.
- Khazanov, A. M. 1984. *Nomads and the Outside World*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 湖中真哉. 2002. 「生業牧畜と市場経済を結ぶ地域ネットワーク－ケニア中北部サンプルの家畜商の事例」佐藤俊編『遊牧民の世界』京都大学学術出版会, 175-222.
- _____. 2004. 「牧畜民による市場の利用方法－ケニア中北部サンプルの家畜市の事例」田中二郎ほか編『遊牧民』昭和堂, 650-686.
- Liagre, L., H. Bebi and A. Erastus-Sacharia. 2000. *Cattle Marketing in Northern Namibia: A Commodity*

- Chain Approach*. Windhoek: The Namibian Economic Policy Research Unit (NEPURU).
- Meat Board of Namibia. 2004. *Annual Report*. Windhoek: Meat Board of Namibia.
- Mendelsohn, J., Selma el Obeid and C. Robert. 2000. *A Profile of North-central Namibia*. Windhoek: Gamsberg Macmillan Publishers.
- 小川 了. 1981. 「フルベ族, ジェンゲルベ・グループの移牧に関する事例報告」『国立民族学博物館研究報告』6 (1): 134-158.
- Rawlinson, J. 1994. *The Meat Industry of Namibia 1835 to 1994*. Windhoek: Gamsberg Macmillan Publishers.
- Republic of Namibia. 2000. *Livestock Marketing in the Northern Communal Areas of Namibia*. Windhoek: Ministry of Agriculture, Water and Rural Development.
- _____. 2003. *2001 Population and Housing Census*. Windhoek: Central Bureau of Statistics.
- Siiskonen, H. 1990. *Trade and Socioeconomic Change in Ovamboland 1850-1906*. Helsinki: SHS.
- 孫 暁剛. 2004. 「「搾乳される」ラクダと「食べられる」ウシー遊牧民レンディーレの生業多角化への試み」田中二郎ほか編『遊動民』昭和堂, 630-649.
- Tapscott, C. and L. Hangula. 1994. *Fencing of Communal Range Land in Northern Namibia: Social and Ecological Implication*. Windhoek: Social Sciences Division, Multi-disciplinary Research Centre, University of Namibia.
- Williams, F-N. 1991. *Precolonial Communities of Southwestern Africa: A History of Owambo Kingdom 1600-1920*. Windhoek: National Archives of Namibia.